

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2018～2022

課題番号：18KT0077

研究課題名(和文)三世代のサマ・バジャウ移民家族を生活史の語り合いでつなぐー記憶の分有と想像力

研究課題名(英文)Handing Over Memories among the Sama-Bajau in Davao City

研究代表者

青山 和佳 (Aoyama, Waka)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：90334218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は大きく分けて、つぎの5つである。(1)筆者と調査地住民(サマ・バジャウ)によるナラティブの語り合いというパフォーマンス、(2)ナラティブの語り直しに基づく民族誌(英語)の出版、(3)アンソニー・リードの本 "A History of Southeast Asia" の共同翻訳の出版、(4)サマ・バジャウを支援してきたセブアノ女性のオーラルヒストリーを収集し、その一部を出版したこと、および(5)本プロジェクトのプロセスを通じて、ダバオ市在住の研究者たちと学術交流を広く行ったことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義は、大きく分けてつぎの3点である。すなわち、(1)「社会的過程として民族誌を書く」という思想の実践を試みることで、調査対象者への応答責任を果たそうとしたことである。これは研究倫理の点で重要な意義をもつ。(2)これまで集団として表象されがちであったサマ・バジャウの人びとに対して、一人ひとりの生を重視する＝一人ひとりの「小さな物語」に耳を澄ませるスタイルでアプローチしたことである。これもまた研究倫理の点で重要な意義をもつ。また、(3)以上を通じて、これまでに「丁寧に聴かれる」ことの少なかったサマ・バジャウの人びとの語りを英語の民族誌の形で発表し社会に届けたことである。

研究成果の概要(英文)：The achievements of this research can be divided into the following five main categories: (1) performances of narrative exchange between the author and residents of the research site (the Sama Bajau); (2) publication of an ethnography (in English) based on the retelling of the narratives; (3) publication of a joint translation of Anthony Reed's book "A History of Southeast Asia"; (4) collecting oral histories of a Cebuano woman who has supported the Sama Bajau and publishing some of them; and (5) academic exchange with researchers in Davao City through the process of this project.

研究分野：東南アジア地域研究

キーワード：サマ・バジャウ フィリピン ダバオ市 ナラティブのナラティブ 記憶の分有 ミンダナオ

## 1. 研究開始当初の背景

2018年度、本研究の着想に至った背景として、研究代表者(以下、筆者)が、ハーバード・イェンチン研究所(HYI)の訪問研究者(2013-2014)として、サマ・バジャウの長老の生活史(オーラルヒストリー法に基づく)を「一人称」のまま「米国人俳優」が「英語」で語る形式でトークを行ったさいに、地域研究者や文化人類学者から「ナラティブのオーナーシップ」について批判を受けたことによる。その批判を前向きに受け止めて、これまで収集したサマ・バジャウの人びとのナラティブを筆者が語り直すことで、サマ・バジャウの人びとに研究成果を還元するべく発想されたのが、本研究である。

## 2. 研究の目的

本研究は、筆者が過去20年間にわたり同じ調査地でのフィールドワークを通じ、オーラル・ヒストリーと家計調査により収集してきた資料を再構成した調査地住民(以下、住民)の生活史を住民と語り合うことによって分有し、他者への想像力を互いに喚起することをおして、オーラルヒストリー(声)を用いた長期にわたる地域研究が開きうる回路を探索することである。

筆者は、1997年以来、同じ調査地に通い続けるフィールドワークを通じ、フィリピン、ミンダナオ島、ダバオ市のサマ・バジャウ社会に関する「五つの家族」の生活史を作成し、日本語と英語で公刊してきた。本研究では、文字を読まない住民の希望に基づき、1)筆者自身が内容を声で伝え、2)三世代に渡る住民自身も自由に声を加え(客観的な時間軸にこだわることなく)、3)住民が希望する写真や映像を記録し、それを住民の望む形で共有することを研究当初の目的とした。

## 3. 研究の方法

(1)バックグラウンドとしてのダバオ市の歴史調査：ダバオ市にある Ateneo de Davao University (AdDU)の Joint-Ateneo Institute of Mindanao Economics (JAIME)に滞在し、ダバオ市の歴史に関する二次資料(文献、統計等)を収集するとともに、現地の研究者と意見交換を行った。

(2)より広いバックグラウンドで本研究のコンテキストを考えるために、Anthony Reid, 2015. *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* (Wiley-Blackwell)の翻訳に取り組んだ。

(3)研究開始後の2019年3月末に、メインの調査地(ダバオ市イスラベルデ)が全焼し、住民の移転・分散が生じたため、当初想定していた五つの家族から、もっともアクセスが可能である一家族を選び、その家族に焦点して、ナラティブの語り直し(オーラルヒストリーを筆者が語りながら応答を得る)を住み込み調査の形で実施した。(ただし、ほかの四家族への訪問も行い、単回で、オーラルヒストリーの部分的共有や写真想起法による語り合いを実施した)

(4)2020年度および2021年度はコロナの影響により本研究を一時中止(繰延)し、2022年度(最終年度)に再開した際も調査地へのアクセスが極めて困難であったため、筆者によるサマ・バジャウ調査において長年、調査助手を務めてきたセブアノ人女性にサマ・バジャウを含めての都市沿岸部居住貧困層の支援に関するナラティブをインタビュー調査した。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、大きく5つに分けられる。

第一に、予測不可能な火災によりその対象は限られたものになったにせよ、筆者が過去に収集したサマ・バジャウ住民のナラティブが写真とともにその関係者に語り直され、その語りにより若い世代が自らのナラティブを引き出され、それをその場で共有し、それに耳を傾けていた年上の世代が自らが想起したナラティブを重ねていくという「記憶を分有」する経験の場を創出できたことである。これは、そのプロセスやパフォーマンスそのものが参加者に意味をもつ。これについては、いわゆる学術的成果物の形で残すことが難しいが、本研究のもっとも重要な成果であると考えている。

第二に、第一の成果(プロセス)を経て、筆者自身がこれまでのナラティブを語り直し、一冊の英語単著にまとめたことである。*An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau* (Kyoto University Press + Trans Pacific Press, 2020)は、観察者と観察対象とが峻別されるデカルト的な実証科学的手法とは異なり、筆者がサマ・バジャウの人びとと「誰であるか」(何であるかではなく)において出会う中で紡ぎ出したストーリーを語る作品である。この作品

に見られる、哲学者トマス・カスリスの議論を援用した人間観・対象との関係の捉え方におけるユニークさやナラティブの重層性が評価され、大同生命地域研究奨励賞を受賞した（2022年7月）。

第三に、共同翻訳により、『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差点』（上・下巻）（名古屋大学出版会、2021年）を公刊したことである。この翻訳は、本研究をより広い歴史的文脈に埋め込むためにとりくんだもので、結果的に、アナル派（社会史）の枠組みに準拠し、環境史や国家をもたない人びと（かつてのサマ・バジャウを含む）が歴史において果たした役割に迫る新しい東南アジア史を日本の読者に広く紹介することができた。この翻訳は、工夫された訳語・訳文だけでなく、注釈や解説も含めて高く評価され、大平正芳記念賞・特別賞を受賞した（2023年2月受賞発表、授賞式は同年6月に開催される）。

第四に、サマ・バジャウの生活史において、実際には大きな役割を果たす外部者（非サマ・バジャウ）とくに地元在住の支援者に注目し、そのナラティブをインタビュー（1回1時間を7回）し、原語（セブアノ語）のトランスクリプション（文字起こし）をハーバード・イェンチン大学のワーキングペーパーとして公開したことである。ダバオ市のローカルヒストリーにおいてこれまでオーラルヒストリーは用いられてきたが、じつは「普通の市民」の語りをその人の「ライフヒストリー」として収集することはほとんどなされてこなかった。この営みは本プロジェクトの最終年に始められたため、まだ端緒にすぎたばかりであるが、今後継続することにより、ダバオ市のローカルヒストリーを豊かにするという貢献ができるはずである。

第五に、本プロジェクトの実施過程を通じて、ダバオ市にあるアテネオ・デ・ダバオ大学(AdDU)のJAIME（前述）と社会科学学科(Social Science Cluster)に所属する研究者および院生と学術交流を行ったことである。たとえば、Philippine Studies Conference in Japan (PSCJ)においてダバオの先住民研究を含むパネル報告を組織したり（2022年11月）、その準備としてパネルメンバーで東京大学ヒューマニティーズセンターで公開セミナーを行ったり（2022年3月）した。また、筆者は、本プロジェクトの総まとめの報告を、AdDUのGraduate Research and Innovation Conferenceにおいて招待講演の形で行い、とくに哲学専攻の研究者と「社会的弱者」と協働研究を行う場合の論点（知識の非対称性、権力の非対称性、言説のギャップなど）にいかに対処しうるのか）について議論した。こうした学術交流はそれ自体が本研究の成果であると同時に、筆者を含む参加者それぞれの将来における研究のインスピレーションとなっている。

以上。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 102号
2. 論文標題 [書評] ケアはつらいよー語ること、語り続けることの意味ー速水洋子編. 『東南アジアにおけるケアの潜在力：生のつながりの実践』京都大学学術出版会, 2019	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 133-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 100
2. 論文標題 長い旅の終わりに：インティメットなりフレクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 227-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳・中島隆博	4. 巻 100
2. 論文標題 エピローグ：往復書簡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 247-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 na
2. 論文標題 クララ・サアク・アロンボの人生：1回目のインタビューのナラティブ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Harvard-Yenching Institute Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 0-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 na
2. 論文標題 クララ・サアク・アロンボの人生：2回目のインタビューのナラティヴ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Harvard-Yenching Institute Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 na
2. 論文標題 クララ・サアク・アロンボの人生：3回目のインタビューのナラティヴ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Harvard-Yenching Institute Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青山和佳	4. 巻 na
2. 論文標題 クララ・サアク・アロンボの人生：4回目のインタビューのナラティヴ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Harvard-Yenching Institute Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 青山和佳
2. 発表標題 共に場所を耕す (Cultivating a Place Together)
3. 学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Waka Aoyama
2. 発表標題 The Life and Death of Papa Melbas: A Prelude to the Christian Conversion of the Sama Dilaut Migrants in Davao City, Philippines, in the late 1990s (2019 Ver.)
3. 学会等名 Social Science Cluster, Ateneo de Davao University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Waka Aoyama
2. 発表標題 Japanese-Style of Fieldwork Involving Multiple Visits over a Long Period of Time: Empathy, Commitment, and Mutual Reflection
3. 学会等名 Social Science Cluster, Ateneo de Davao University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山和佳
2. 発表標題 ケアはつらいよ：語ること、語り続けること
3. 学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青山和佳
2. 発表標題 ドキュメンタリー作品「あの夜」解説
3. 学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Waka Aoyama
2. 発表標題 DEAI: Encounter Four Mindanao Rresearchers
3. 学会等名 Phililppine Studies Conference in Japan (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Waka Aoyama
2. 発表標題 Our Ongoing Project: Handing Over Memories
3. 学会等名 Ateneo Graduate Research and Innovation Conference (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青山和佳
2. 発表標題 東南アジアからノで世界を視る：人文系地域研究のアクチュアリティ
3. 学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 青山和佳 編集責任	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学東洋文化研究所	5. 総ページ数 185
3. 書名 東洋文化 102号	

1. 著者名 アンソニー・リード著、太田淳・長田紀之監訳 青山和佳・今村真央・蓮田隆志訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 800
3. 書名 世界史のなかの東南アジア：歴史を変えた交差点	

1. 著者名 Waka Aoyama	4. 発行年 2020年
2. 出版社 University of Kyoto Press + Trans Pacific Press	5. 総ページ数 428
3. 書名 An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------